訪問リハビリを終了すると生活は変化するのか

How does the termination of home-visit rehabilitationaffect on functional status?

竹内球菜[1)] 閑野智[1)] 石森卓矢[1)] 風晴俊之[2)] 美原盤[3)]

Marina TakeuchiPT[1)]Satoshi KannoPT[1)]Takuya Ishimori OT[1)]

Toshiyuki Kazehare PT[2)]Ban Mihara MD[3)]

1)脳血管研究所美原記念病院訪問看護ステーショングラーチアリハビリテーション部門

2)脳血管研究所美原記念病院リハビリテーション科

3)脳血管研究所美原記念病院神経内科

1)Department of Rehabilitation、Institute of Brain and Blood Vessels、MiharaMemorial Hospital、Home-visit Nursing Station Gratia

2)Department of Rehabilitation、Institute of Brain and Blood Vessels、MiharaMemorial Hospital

3)Department of Neurology、Institute of Brain and Blood Vessels、Mihara Memorial Hospital

キーワード：訪問リハビリ、終了、生活

［はじめに］訪問リハビリの目的は、日常生活の自立や主体性のあるその人らしい生活の再建及び質の向上を図ることである。社会的に自立するためには、訪問リハビリから脱却することが重要であると考え、当事業所では、日常生活の自立や社会参加を獲得した利用者に対しては、利用者同意のもと訪問リハビリを終了にしている。今回、訪問リハビリを終了した利用者のADLとIADL、生活範囲が終了から変化しているかを追跡調査した。

［対象・方法］平成25年4月から平成26年3月に、目標を達成して訪問リハビリを終了した脳卒中患者37名のうち、追跡調査が可能であった利用者13名を対象とした。指標は、Functional Independence Measure(FIM)、Frenchay Activities Index(FAI)、Life Space Assessment(LSA)とし、訪問リハビリ終了時と、終了後の再測定時の2時点を比較した。なお、再測定は自宅に訪問し、聞き取り調査にて行なった。

[結果]終了から再測定までの期間は501.5±88.5日であった。FIM、FAI、LSA全ての指標において有意差は認めなかった。

[考察]一般的に、訪問リハビリという運動機会が失われることで、生活能力の低下や生活範囲の狭小が懸念されるが、訪問リハビリを終了した利用者は、ADL や IADL、生活範囲が維持できていた。これは、訪問リハビリが機能や動作練習のみならず、生活全般にかかる活動を支援し、主体性のある生活の再建が図られるためだと考える。本人の生活状況に合わせ、適切な時期に終了することは本人の社会的自立を促進しうると思われる。